様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 15 日現在

機関番号：32653
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520597
研究課題名（和文）　文化の違いに配慮した医療面接の教授法開発
研究課題名（英文）A Teaching Method for Medical Interviews in a Cross-cultural Situation

研究代表者
遠藤　美香（ENDO MIKA）
東京女子医科大学・医学部・講師
研究者番号：70242302

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、医学生を対象に、英語による模擬医療面接実習を行い、将来医師となり英語を話す患者の診療をする際、患者の持つ文化背景に配慮をもって、必要な情報交換を適切に行いながら治療ができる医師を育成するための教授法構築に寄与することである。実証研究として、三年間継続して英語模擬医療面接実習を実施し、データ収集を行い、今後の分析の礎を築くことができた。データはすべて電子ファイルに保存し、今後必要に応じて情報を参照、分析することが可能である。また、英語による模擬医療面接実施のためのマニュアルの整備を行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this present research is to explore a teaching method of medical interviews in English, to which medical students could be pre-exposed before they become a doctor. Doctors are now expected to have an ability to communicate with patients from various different cultural backgrounds. For current three years, we have conducted English medical interview training sessions for (1st to 6th-year) medical students, and have gained a volume of data which can be contributed to establishing a new teaching method. All the data has been converted into computerized files so that we can access to it easily. Moreover, we have compiled a manual for carrying out medical interview training sessions in English.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：教授法、タスクに基づく指導法、ESP、医療面接、コミュニケーション・ストラテジー

１．研究開始当初の背景

タスクを遂行するために、学習者が目標言語を用いてコミュニケーションをとることに焦点をおく「タスクに基づく指導法」（Task-Based Language Teaching）は、国内でも一定の研究・実践がなされてきていたが、ESP（English for Special Purposes）に特化されるに至っているものは、あまりない中で、医学という分野で、学生が将来必ず必要になる医療面接という設定でタスクを遂行するという英語学習プログラムを、2005年度から開始していた(現代 GP「アイ・アム・ユア・ドクター　プロジェクト」)。このプログラムの実践を続けながら、それまでに蓄積してきた実践方法を、教授法として確立することが必要となってきた。

２．研究の目的

本研究の目的は、ESP の現場で、医学生が英語を用いて患者に対して医療面接を行うという医療実践能力を開発する体験英語学習の方法論を確立し、その中で文化・コミュニケーション様式の違いにも配慮できる医療コミュニケーションの教授法を開発し、その効果を実証することであった。

さらに、学習者の実際のコミュニケーション・ストラテジーについての資料収集を行い、教授法との相関を明らかにするうえでのデータを得ることであった。

３．研究の方法

研究方法は、理論面と実証面に大別できる。

実証研究については、（１）年に2回3年間継続して英語模擬医療面接実習を施行し、今後の分析を行う上での礎となるデータ（①実習中のSPと医師役の学生による音声資料、②実習前における学習者の背景英語経験および英語学力、③実習前後の学習者の動機付け要因の5段階評価）の収集を行った。データはすべて電子化ファイルに保存し、すべてのファイルを集めたアーカイヴを構築した。今後、必要に応じて情報を取出し、分析、参照することが可能である。

（２）医療面接の手順、状況設定に沿った英語表現集の整備及び、改定を行った。これは医学生(学習者)が自習の資料として使用が可能な形式であり、また、英語模擬医療面接を指導する教員のレファレンスとしても使用できる内容とした。

理論研究の面では、日本語による模擬医療面接実習についての開発が新展開している段階であるので、その情報を入手すること。また、異文化間のコミュニケーションにおける問題点や、それを克服する教授法の展開について、情報収集をおこなった。

４．研究成果

（１）英語による模擬医療面接実習の実施
（２回／年度　X　３年　＝　６回）

① 参加学生人数（のべ216名）
2009年12月　19名
2010年3月　65名
2010年12月　20名
2011年3月　39名
2011年12月　20名
2012年3月　53名

② SP講師
本実習では、SP講師は模擬患者役と、英語によるコミュニケーション一般についての指導の両方の役目を務める。実施にあたり協力を得たのは、次の表に示す 5 人の英語を母語とする、医学部で英語の授業を担当する外国人講師である。

	米(男性)	加(女性)	英(男性)	豪(女性)	トルコ(女性)
2009年12月	✓	✓		✓	✓
2010年3月	✓	✓	✓		✓
2010年12月	✓		✓	✓	
2011年3月	✓	✓	✓	✓	
2011年12月	✓		✓	✓	
2012年3月	✓	✓	✓	✓	

＜英語模擬医療面接実習の流れ＞

１．　模擬患者（SP講師）と医師役（1年生から6年生までの医学生対象）の1対1対応の模擬医療面接（シナリオ、コンテは設定済み)。
（この模様は、MD２台を使用し同時に録音。一方は研究資料用、もう一方は学生用：復習できるよう実習後に渡す。）

↓

２．フィードバック・セッション：録音された MD の音声を再生し、面接の様子をふりかえりながら、SP講師より、主に患者の側からの視点で、英語によるコミュニケーション一般についての指導を行う。また、このとき、日本とは異なると考えられる文化的背景から、特に配慮されるべき点（言語的、非言語的双方の観点から）のコメントも行われる。

↓

３．2でのSP講師からのフィードバックを取り入れたうえで、同じシナリオを再び練習する。

※１～３のステップを、時間の許す限り(1回あたりの実習時間は1時間、または30分のセッション)繰り返し行う。

（２）模擬医療面接の実施体制の確立

① 模擬患者（Simulated Patient: SP）として、かつ英語によるコミュニケーションに関する指導を同時にできる外国人講師の研修を継続した。また、指導法・シナリオ・教材についてのフィードバックも得た。

② 模擬医療面接実習の重要性の啓発（対象：学生及び、カリキュラム改訂委員会）

③ 実習前後における学習支援

④ 英語模擬医療面接実施マニュアルの整備（本学だけでなく、他の教育機関でも実施可能なように、a.必要な人材、b.施設、c.教材、及びd.準備の手順をまとめた実施要綱の作成）

a. 模擬患者（SP）：模擬患者の養成講座（受講者数名募集：医学部で英語を指導している外国人講師）

b. 模擬医療面接実習実施の部屋を確保（現実感を出すために、実際の医療面接が行われている程度の小さな仕切りのある空間。机といす２脚は最低必要。）本研究の実習では、スキルスラボの個室及び、テュートリアル室を使用した。

c. 教材の準備と配布

SP向け：シナリオ（年齢、性別（男女ともに用意）、家族歴、社会歴、疾患を特定したものを医師とともに作成、英語で表記したもの。）→準備をしていただく期間を見込んで実施日から１か月ほど前までには届くように手配する。

学生向け(学年別)：学習の手順書、医療面接で使用する状況別英語表現集(学年共通)、検査結果のデータ(英語表記)、診療場面コンテ→ 実施日より２週間ほど前までに配布開始。

d. 準備の手順

1. 実施時期を決定する。
2. 実施場所の確保をする。
3. 模擬患者役（SP）の講師とアポイントメントをとる。
4. 学生に英語模擬医療面接実施の告知。参加希望者の募集。
5. 実習参加希望者と連絡をとり、予約日時を調整・決定後、(個別にメールで)通知を出す。
6. SP にシナリオ及び、スケジュール表を渡し正式依頼。
7. 学生に渡す教材を印刷し配布。
8. 実施日当日の配布プリントを作成。（ｉカルテ（男・女性患者用)、ii フィードバック・シート（実習中に講師より学生に英語によるコミュニケーションの取り方についてのコメントをしていただく時使用する評価表)、iii-iv 実習前・実習後自己評価表）
9. 実習記録媒体の準備、確認（例、MD レコーダー、カメラ、ビデオカメラ）
10. 実施日当日:実習室及び本部設営、講師・学生間のコーディネイト

（３）模擬医療面接に使用する英語シナリオの整備

① SP 向けの資料（５症例）

② ①に対応する、学生向けの準備資料

（４）医療面接で使用する英語の代表的な表現をまとめた表現集を作成。医療面接の手順に沿って状況別に列挙し、文化や言語の違いによる配慮を必要とするものに関しては、注釈を付けた。学生が、実習前後での準備や定着練習に使用しやすい形式にした。また、レファレンスとしても使用可能である。

（５）模擬医療面接時のデータ

① 個々の医療面接時の音声データ（SP からのフィードバックセッションも含む）

② 実習前後の学生による自己評価（実施形式は A4 用紙に記入、９項目５段階評価＋記述式、記録はエクセルファイルに保存。）

今後は、本研究の助成期間であるこの３年間で実施した６回の英語模擬医療面接実習から得られたデータ解析をさらに進めて、学習者の医療面接技能(特に異文化コミュニケーション・スキル)の獲得に寄与する要因を明らかにする。そのうえで、それらの要因を活性化する教授法を提案し、実際の効果を検証することが望まれる。

（６）英語模擬医療面接実習に参加した学生の調査結果

① 留学希望者と本実習への参加者との関係

本研究の６回の実施期間に、のべ 216 名の学生が実習に参加したが、その中で、次の a と b の要件を満たす者を表にまとめた。なお、学年の次のかっこ内の数字は、実習参加回数を示す。

a. 本研究期間のすべての年度で参加した者。

b. 5 年次の交換留学制度に申請の希望をす

る者。

学生	21年度	22年度	23年度	留学希望
K.T.	1年生(1)	2年生(2)	3年生(2)	✓
E.R.	1年生(2)	2年生(2)	3年生(1)	✓
M.R.	1年生(1)	2年生(2)	3年生(1)	✓
T.M.	1年生(1)	2年生(2)	3年生(3)	✓
S.F	2年生(1)	3年生(1)	4年生(1)	✓
M.S.	2年生(1)	3年生(2)	4年生(2)	✓
N.Y.	2年生(1)	3年生(2)	4年生(1)	✓

次の表に示すのは、5 年次の交換留学に行く以前の年度に本実習に参加し(カッコ内は参加数)、その後実際に留学した学生のリストである。

	21年度	22年度	23年度	留学先
N.H.	3年生(2)	4年(1)	5年生(1)	メモリアルハーマン病院(米国)
F.R.	3年生(1)	4年(0)	5年生(1)	ブリュッセル自由大学
M.E.	3年生(1)	4年(3)	5年生(1)	マルセイユ大学
H.K.	3年生(0)	4年生(2)	5年生(1)	マウントサイナイ医科大学(米国)
N.R.	3年生(0)	4年生(2)	5年生(1)	マルセイユ大学
T.S.	3年生(0)	4年生(2)	5年生(1)	カーディフ大学

渡航先は必ずしも英語圏ではないが、英語で医療面接の実習をした経験が、留学先でかなりの自信になったことが、報告されている。

② 本実習内で SP 講師から得たフィードバックの**利点**（主に、実習後自己評価シートの中の自由記述欄に挙げられていたコメントを情報源とする。）

－事前に用意された表現集に出ている言い回しの他に、別の表現の仕方を、状況に合わせて、直接聞くことができた。(4 年生)
－SP 講師の国で起きている現実的な問題に基づいたコメントをしてもらえた。(4 年生)
－視線を合わせてよいときと、そうでないときがあることを学べた。(4 年生) 話しづらい質問のときに、どのようにアイコンタクトをしたらよいかについて詳しく教えてもらえた。(4 年生、複数)
－医師として、私的な内容を聞かなくてはならないとき、どのように質問したらよいかを具体的に示してもらえた。(4 年生)
－外国では日本と違い、違法薬物使用についての質問をしなくてはならないこと、またその尋ね方を学べた。(4 年生、複数)
－Bad news の伝え方について学ぶことができた。(6 年生)
－検査結果を伝える時は、結果を単純に伝えるだけではなく、安心感を与えるような表現があることを教えてもらえた。(1 年生)
－SP 講師は医師ではなかったので、真に患者目線で、医師から聞きたいことや、医師に対する希望がどのようなものか聞けたと思う。(1 年生)
－日常的な言い回しと、医療での場面で期待される表現とには差があることを知ることができました。(4 年生)
－患者にとってわかりやすい言葉遣いをしなくてはならない(専門用語は言い換える)ということを学べた。(３、４、５年生)
－患者に対して失礼のない言い方など、普段学べないことも学べた。(4 年生)
－共感を示す態度の表し方を学べた。(4 年生、複数)あいづちのうち方を学べた。(4 年生) ジェスチャーなどを使うことも意思伝達にはとても重要だと感じた。(4 年生)
－単語の微妙なニュアンスを知ることができました。(4 年生)　職業を尋ねる時は job ではなく、occupation を使うとよいと知りました。(2 年生)
－（内容を正しく伝えるためには）動詞の時制が大事であることを知りました。(1 年生)
－冠詞や助動詞の使い方など、注意する点を指導してもらえた。(4 年生)
－医療面接の流れを学ぶことができました。(1 年生、3 年生、4 年生、5 年生から複数)
－医療面接の手順や内容は日本と外国では異なるということに気づいた。(3 年生)
－日本と英語圏の国での患者への配慮の仕方の違いを学んだ。(4 年生)
－外国から日本に一時的に来ている患者さんに対して特にどのようなことを聞くべきか学ぶことができた。(2 年生)
－アメリカでは system review が重視されているということなので、渡航前によく練習する必要があるとわかった。(5 年生複数)

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕(計２件)

① 野田小枝子, Todd Stoudt, 鈴木光代, 遠藤美香, 大久保由美子, 小島多香子, 菅沼太陽, 吉岡俊正, Clinical Interviews with a Simulated Patient: Making Teaching Materials for an SP Program, 第 13 回日本医学英語教育学会, 2010.7.4, 東京
② 野田小枝子, Building on the “I Am Your Doctor” Project, 第 12 回日本医学英語教育学会, 2009.7. 19, 福島

６．研究組織

(1)研究代表者

遠藤　美香（ENNDO MIKA）
東京女子医科大学・医学部・講師
研究者番号：70242320

(2)研究分担者

菅沼　太陽（SUGANUMA TAIYO）
東京女子医科大学・医学部・助教
研究者番号：00328379

吉岡　俊正（YOSHIOKA TOSHIMASA）
東京女子医科大学・医学部・教授
研究者番号：60146438

(3)連携研究者

野田　小枝子（NODA SAEKO）
津田塾大学大学院・文学研究科・特任教授
研究者番号：60408474